

氏 名	永井 那和
学 位 の 種 類	博士（異文化コミュニケーション学）
報 告 番 号	甲第406号
学位授与年月日	2015年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	クリエイティビティのテキスト性とコンテキスト性 —音楽スタジオにおける集団的作曲行為の談話分析—
審 査 委 員	(主査) 小山 亘 平賀 正子 井上 逸兵(慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授)

## I. 論文の内容の要旨

本論文は、「クリエイティビティのテキスト性とコンテキスト性—音楽スタジオにおける集団的作曲行為の談話分析—」と題し、目次・本文・注釈・参考文献を含め 231 ページから成る。本論文の構成は、以下の通りである。

### (1) 論文の構成

#### 第1章 序

- 1.1 本研究の目的、及び概要
- 1.2 本研究の意義
- 1.3 本研究の構成

#### 第2章 先行研究

- 2.1 現代クリエイティビティ研究
  - 2.1.1 クリエイティビティの定義、種類、フォーカス
- 2.2 クリエイティビティに対する3つのアプローチ
  - 2.2.1 個人主義的アプローチ
  - 2.2.2 社会文化的アプローチ
  - 2.2.3 学際的アプローチ
- 2.3 クリティーク
  - 2.3.1 現代クリエイティビティ研究の問題点
  - 2.3.2 言語とクリエイティビティ
  - 2.3.3 ディスコースとクリエイティビティ
  - 2.3.4 総括、および本研究におけるクリエイティビティ観

#### 第3章 理論的枠組み

- 3.1 社会記号論系言語人類学とそのコミュニケーション理論
- 3.2 コミュニケーションに根差したクリエイティビティ再訪
- 3.3 分析の手順と手法
- 3.4 分析概念
- 3.5 総括

#### 第4章 前提的コンテキスト分析

- 4.1 実践共同体

## 4.2 実践共同体としてのバンド

### 4.2.1 相互的従事関係

### 4.2.2 協同プロジェクト

### 4.2.3 共有レパートリー

## 4.3 総括

## 第5章 分析と考察

### 5.1 直近の前提的コンテキスト

### 5.2 データ収集方法

### 5.3 エピソード記述に見るクリエイティビティの諸相

#### 5.3.1 エピソードⅠ：転調@スタジオ内

#### 5.3.2 エピソードⅡ：並行世界@ロビー

#### 5.3.3 エピソードⅢ：再転調@スタジオ内

#### 5.3.4 エピソードⅣ：リタルダンド@ロビー

#### 5.3.5 エピソードⅤ：アフター・ディスコース

#### 5.3.6 エピソード記述に見るクリエイティビティ

### 5.4 集団的作曲行為の談話分析

#### 5.4.1 分析フェイズ1：「転調」@スタジオ内

#### 5.4.2 分析フェイズ2：「並行世界」@ロビー

### 5.5 考察

#### 5.5.1 分析結果

#### 5.5.2 記述的、説明的妥当性

#### 5.5.3 理論的、方法論的貢献

## 第6章 結論

### 6.1 総括

### 6.2 限界・含意・展望

## 参考文献

### (2) 論文の内容要旨

本研究は、社会記号論系言語人類学の枠組みに基づき、コミュニケーションに根差したクリエイティビティについて、理論研究、及び事例研究を通じて考究することを目的としたものである。まず序章で、本研究の目的および概要、意義が記され、続いて、クリエイティビティにかかわる理論研究が第2章と第3章で呈示され、第4章と第5章が事例研究に充てられている。

まず第2章の「先行研究」では、1950年代以降、北米心理学から興り、本格化していった現代クリエイティビティ研究におけるこれまでの研究蓄積と拡がり概観されている。第2章第1節では、現代クリエイティビティ研究が措定する、クリエイティビティの基本要件（新しさ(novelty)と適切さ(appropriateness))、クリエイティビティの種類（「ビッグ C」、「スモール C」、「ミニ C」、「プロ C」）、クリエイティビティの諸相、及び、研究のフォーカス（産出物、人物、認知的／社会的過程、外的圧力／環境、説得／影響力、実践と潜在）が同定され、クリエイティビティの類型化が為されている。第2節1項では、現代クリエイティビティ研究が擁する3つのアプローチの一つである、心理学、認知心理学、認知神経科学を中心とした個人主義的アプローチを、続く2項では、社会学、グループ・クリエイティビティ研究、人類学、異文化コミュニケーション、歴史学の知見を援用する社会文化的アプローチを、そして3項では、個人主義的アプローチ、社会文化的アプローチの両者を緩やかに結合させた学際的アプローチを概観している。以上を受け、第3節1項では、現代クリエイティビティ研究を批判的に吟味し、(1) 言語論・コミュニケーション論的な視座からのアプローチの不在、そして(2) 個人主義的アプローチと社会文化的アプローチを包摂するメタ理論の不在という問題点を指摘している。そして2項では、近年の応用言語学にみられる「言語とクリエイティビティ」に関する議論を、3項ではそれを批判的に乗り越えた「ディスコースとクリエイティビティ」の議論の特徴を確認することで、上記2つの問題点に対する対処法が提示されている。4項では、以上の議論をふまえ、先行研究の総括として、本研究のクリエイティビティ観が示唆され、そのような視座の背景となる理論的枠組みである社会記号論系言語人類学への言及が為されている。

これを受けて、第3章「理論的枠組み」において、第1節で本研究が依拠する社会記号論系言語人類学のコミュニケーション理論を導入し、第2節では、当該コミュニケーション理論から導出されるクリエイティビティ観について詳述している。続く第3節では、第4章と第5章において行われる事例研究への準備として、分析の手順・手法が示され、第4節では、実際のデータ分析に用いられる分析概念（フレーム、フッティング、コンテクスト化の合図、メタ意味論的・メタ語用論的言語使用、生起する韻律構造）が導入・説明されている。

次に第4章「前提的コンテクスト分析」では、第5章で行う、音楽スタジオでミュージシャン同士が協同的に従事した集団的作曲行為の談話分析への予備的論述として、集団的作曲行為をとりまくコンテクストが記述・分析されている。その際、第1節において「実践共同体」(community of practice)の概念を導入し、第2節では実践共同体の概念を援用することで、調査者（学位申請者）

がサポート・ドラマーというステータスで参与し、約 4 年に亘りフィールド調査をおこなってきたバンドの特徴を、相互的従事関係（1 項）、協同プロジェクト（2 項）、共有レパートリー（3 項）という 3 つの軸から分析・描出している。

第 5 章「分析と考察」では、(1) 音楽に関する知識や技術を背景とする高度な専門性、(2) マンガやビデオ・ゲームといったサブ・カルチャー的知識からなる強度の内輪性、そして、(3) 言語だけでなく、音楽を介してのコミュニケーションという意味でマルチ・モーダルな特性、以上のような特徴を示す談話データの理解と解釈を促進するため、談話分析へのさらなる予備的研究の一環として、第 1 節で、実践共同体（バンド）の 3 名の参与者が従事した集団的作曲行為の近傍を取り巻くコンテクスト——セカンド・アルバムに向けての音源制作プロジェクト——が素描されている。続く第 2 節では、データの収集方法とデータの構造が概略的に示され、第 3 節では、全体として約 3 時間、トランスクリプトとしては 2,200 行に及ぶ、収集された談話データが示す集団的作曲行為の大きな流れを把握するため、参与者／調査者（学位申請者）が、録音データや、フィールド・ノーツから総合して作成した民族誌的エピソードが付され、よって、談話分析の対象となるデータのコンテクストが示されている。これらの準備作業を経て、第 4 節では、データに談話分析が施され、集団的作曲行為というコミュニケーション出来事における、「言われたこと（what is said）」の意味にかかわる言及指示のテキスト生成、「為されたこと（what is done）」の意味にかかわる相互行為のテキスト生成、すなわち、テキスト化、そして（コンテクストへの前提的指標作用と創出的指標作用からなる）コンテクスト化のプロセスが精緻に描出され、クリエイティビティのテキスト性およびコンテクスト性が記述・分析されている。以上に基づき、第 5 節において、(1) クリエイティビティは、現代クリエイティビティ研究において措定されているいかなる種類や側面においても、その根本において、コミュニケーション出来事にその淵源をもつこと、そして、(2) 現代クリエイティビティ研究の問題点の一つとして同定された、個人主義的アプローチと社会文化的アプローチとの乖離、この乖離が埋められ学際的接合を見る場所もまた、コミュニケーションの地平においてであることが改めて主張され、本研究の説明的、方法論的妥当性、及び現代クリエイティビティ研究への貢献についての論及が為されている。

第 6 章「結論」では、本論文での議論の総括が為され、本研究の理論面、分析面における限界が同定され、それを乗り越える指針として、さらなる事例の蓄積と比較対照研究、及び、言語と音楽が介在するコミュニケーションにおけるデータ記述法の洗練という 2 点が指摘されている。

## Ⅱ．論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

従来のクリエイティビティに関する研究、すなわち、1950 年代以降、クリエイティビティという概念を学術的に考究することを目的として北米の心理学から興った現代クリエイティビティ研究は、(1) 心理学、認知心理学、脳神経科学などに依拠する個人主義的アプローチ、(2) 社会学、人類学、異文化コミュニケーション学、グループ・クリエイティビティ研究、歴史学等の知見を援用する社会文化的アプローチ、そして、(3) 個人主義的アプローチと社会文化的アプローチを緩やかに組み合わせた、第三の視点としての学際的アプローチへと時代を経るにつれてシフトしながら、クリエイティビティに対する理解を深め、多様な視点を提供してきた。その一方、当該研究領域では、言語やディスコース、コミュニケーションという側面からクリエイティビティを論じることが十分には為されておらず、また、今日、第三の視点として採られつつある学際的アプローチは、第一の視点である個人主義的アプローチと第二の視点である社会文化的アプローチを緩やかに接合したに過ぎず、両者を一貫したかたちで結びつける土台となるメタ理論は不在であり続けている。そのような背景のなか、本論文は、言語学、応用言語学における「言語とクリエイティビティ」や「ディスコースとクリエイティビティ」という、言語やディスコースからクリエイティビティを考究する議論に言及しながら、社会記号論系言語人類学のコミュニケーション理論を導入し、理論研究、並びに事例研究を遂行することで、上記二つの問題を乗り越える方法の提示を試みたものである。

以上からも明らかなように、本論文は、クリエイティビティを論じるにあたり、言語やコミュニケーションの重要性を示した点で現代クリエイティビティ研究に対する理論的貢献がみられる。さらに、事例研究として、4 年以上に亘り、インディーズ・ロックバンドにサポート・ドラマーとして参加しながらフィールド調査を遂行し、そこで収集された談話データ、特に、音楽スタジオで、複数のバンド成員が協同して行う集団的作曲行為を、談話分析の手法を用い、新たな曲（産出物）自体の形成だけでなく、言及指示、社会指標／相互行為という 3 つの層がダイナミックに絡み合う相互作用の連鎖として読み解くことで、コミュニケーションに根差したクリエイティビティの諸相と性質、すなわちクリエイティビティのテクスト性とコンテクスト性の生成過程を詳細な記述を通して提示し、考察している点が特徴的であるといえる。

## （２）論文の評価

本論文は、いくつかの点で評価できる。

第一に、現代クリエイティビティ研究への理論的貢献、特に、社会記号論系言語人類学のコミュニケーション理論の現代クリエイティビティ研究への体系的導入である。本論文は、社会記号論系言語人類学のコミュニケーション理論に基づき、理論研究および事例研究を遂行し、コミュニケーションに根差したクリエイティビティの多層的動態性について考究することで、クリエイティビティの基本要件、種類、研究フォーカスにかかわる理論を発展させ、個人主義的アプローチ、社会文化的アプローチを経て学際的アプローチに至った現代クリエイティビティ研究における、コミュニケーション理論からの新たな視点を提示している。この点において、本論文は、現代クリエイティビティ研究に対し理論的な貢献を果たしているといえ、また、本論文は、現代クリエイティビティ研究と、ほとんど理論的交流が為されないまま、応用言語学において展開してきた「言語とクリエイティビティ」や「ディスコースとクリエイティビティ」に関する議論を現代クリエイティビティ研究に接合し、両者の理論的断絶を補完している点においても高く評価できる。

第二に、本論文は希少な事例を提示し詳細に分析しているという点においても評価することができる。上述のように、現代クリエイティビティ研究は、そのアプローチを徐々に拡大してきたのだが、それに伴い、多様なコンテキストにおけるクリエイティビティの研究蓄積の必要性が顕在化してきた。その一つとして、ミュージシャン同士が、音楽スタジオという密室／ブラック・ボックスで協同して行う集団的作曲行為のクリエイティブ・プロセスが挙げられており、本論文は、まさにそれを研究対象として、学位申請者がサポート・ドラマーとしてバンドに長期的に参加しながらフィールド調査を行い、その過程で収集されたデータを民族誌的エピソードや談話データとして示し、それらを、言語、ディスコース、コミュニケーションという視座からイーミック、エティック両側面に亘って詳細に分析しているという点で高く評価することができる。

他方、本論文には指摘すべき問題点もある。本論文は、理論研究にくわえて事例研究も提示しているが、後者において扱われた集団的作曲行為は、言及指示、社会指標、音楽テキスト（曲）の次元におけるクリエイティブなプロセスを精緻に描出しているとはいえ、それはあくまでも一つの事例に過ぎない。また、言語にくわえ、非言語、とくに音楽的記号が複雑に絡み合うマルチ・モーダルな特性を持つコミュニケーションのデータを書き起こすにあたり、音楽的なコミュニケーションの部分が、言語記号に比べて相対的に副次的な位置にあり続けている。以上２点に関し、前者については、異なるコンテキストにある事例

の研究を蓄積し、本研究で扱った事例研究との比較対照を行い、コミュニケーションに根差したクリエイティビティという、一般的なレベルにおける議論との結びつきをより明示的にしていくこと、後者に関しては、音楽コミュニケーションを研究対象とする民族音楽学などに見られる記述法等を参照し、言語と音楽を介したコミュニケーション・データの記述法を新たに模索することが、これからの課題となる。

このように、本研究には未解決の課題がいくつか残されてはいるが、その貢献度や独自性が損なわれるものではない。本論文は、包括的な理論的考察と精緻な談話分析、特に、現代クリエイティビティ研究、応用言語学における「言語とクリエイティビティ」、「ディスコースとクリエイティビティ」に纏わる議論を、社会記号論系言語人類学の視座から統合することを試み、さらには参与者・調査者として音楽スタジオにおける集団的作曲行為にかかわり、そのプロセス、すなわち、当該事例におけるコミュニケーションに根差したクリエイティビティのテキスト性とコンテキスト性の形成過程を精緻に記述してみせている。特にこれらの点において本研究は高水準の研究成果を導き出していると評価できるだろう。